

2021年1月度総評（浦歌無子）

木の家の闇の重さに湯冷めして

長谷川柊香（宮城県）

木は乾いたり湿ったり表情を持っている分、「木の家」は光も闇もたくわえやすい気がします。身体で感じる重さのある闇。同じ作者による「危篤の報空港染める冬日差」は光。かなしみゆえに感知される「冬日差」。どちらも鋭敏な感覚が描かれています。

歩くたび削れる

靴底のために

まだ肉体のやわらかい修羅

高良真実（東京都）

ゆるやかな言葉の運びと「まだ」と「やわらかい」の語に、「肉体」の痛みを慈しむ心持ちが伝わってきて印象に残りました。

ひとつだけ願いが叶うなら

残りの願いごとは

自分でなんとかするのに

雨傘うみ（愛知県）

一番叶えてほしい「願いごと」は「ひとつだけ」。そしてそれは「自分でなんとか」できない願いごと。だからこそただただ願うしかない。

たまごを高速でとぐ

あなたは美しいという意味

青野 椰栄（東京都）

「とく」ではなく「とぐ」に、“詩”になる前の“詩のたまご”である言葉を研いで、「あなたは美しいという意味」の詩を生みだそうとしているように読めました。

くらやみの自室に何もかも置いて

来たように立つくるぶしの白

さいう（愛知県）

一歩踏みだそうとする決意の身体を「くるぶしの白」で表しているところが巧みです。「くらやみ」との対比で白い「くるぶし」が真っさら目にもまぶしく感じられます。

雨粒が手紙に落ちてインクが滲む
流れた青にふれて
せめて自分も汚れてみる

春町 美月（大阪府）

「流れた青」は涙のよう。手紙の送り主と想いを共有したい気持ちが伝わってきました。

教室の窓から落ちる
ひかりには
踏みにじりたくなる音がある

さいう（愛知県）

「教室の窓から落ちる／ひかり」に「踏みにじりたくなる音」をとらえる心理、青春期の葛藤が、視覚と聴覚の連動によって立体的に伝わってきます。同じ作者の「金魚鉢からててぼぼと泡の匂い」は聴覚と嗅覚の連動が魅力的。

空想の世界にペンの染ひとつ

さいう（愛知県）

詩は「空想」を言葉にする作業でもありますね。「空想」の文字から「空」が思い起こされ、詩の大空へと誘われます。「ペンの染」は一粒の雨。それが空から降ってきて一篇の詩になるさまが思い浮かびました。

おまえ、って呼び方にある
巢の雛を
かき抱くよな
なまぬるい熱

さいう（愛知県）

「おまえ」という呼び方は、関係性によってこめられた意味合いが大きく違ってきます。秀逸な比喻によって「おまえ」に、形と温度が与えられており、この「おまえ」は、愛情に裏打ちされた「おまえ」であることがうかがわれます。また、「巢の雛」は常に死と隣り合わせ。高い体温とともに二人の繊細な関係に対する不安も潜んでいるようです。

祝日と名付けた文鳥のまばたき

合川秋穂（京都府）

幸福の象徴のような文鳥の存在。眠気をさそうような「まばたき」。また、「まばたき」の語は「はばたき」も連想させ、「祝日」の自由さも伝わってきました。

君のためだけにある一文字

そんなものだって作れる

ヒロミヤカザル（京都府）

「君のためだけ」に「文字」を作るという愛のかたち。既存の文字では伝えることのできな
いほどの思いとともに新しい文字によって愛を更新したいという気概がうかがえます。

うるかすも
したらもだっけも
通じない
そんな街にて
おはよう靴下

加藤 美紀（愛知県）

「うるかす」は漢字で書くと「潤かす」で、「お米に水分を吸わせる」「水に漬けておく」と
いう意味とのこと、調べてみて初めて知りましたが、素敵な方言ですね。遠く離れた故郷へ
の思慕を胸に一日のはじまりに靴下を履いているシーンが見えてきました。「おはよう靴下」
のユーモアが詩を開放し、心を掬っています。

生き延びた言葉に無数の銃痕

宇井 麻千（大阪府）

言葉はどれだけ危険にさらされるのか。「無数の銃痕」を残しながらも、「生き延び」てくれ
たことに感謝したい気持ちになりました。きっとどんなに撃たれても、残るべき言葉は残る
のだと。それは私たちが生かす言葉なのだと信じたい。

二席分使って眠るおじさんに
死ねと思って
生きろと思う

郡司和斗（茨城県）

瞬間的に湧き上がってきた強い感情。ささいな出来事に対して、それほどの感情が一体どこ
からやってくるのかきっと自分にもわからない。だから、自分で自分に驚いたように打ち消
す。呪いを解くかのように。

つむじ風に舞い上がる
ビニール袋
落ちる場所を知りたくて
駆け出していた私

宇井 麻千（大阪府）

木の葉と違って、風に舞い上がる「ビニール袋」がわびしく見えるのは、ゴミとして捨てら

れたものだからでしょうか。どこまで運ばれるのかわからない。それはわたしたちの生そのものでもあります。そう考えると「ビニール袋」に思わず心を寄せてしまった「私」の心の動きが、にわかに身近なものに感じられます。

咳をする父の電話

洪水の後の何もない感じ

いけす（東京都）

「咳をする父」にいつかは自分より先にやってくるであろう死が思い起される。日常がふいに奪われることへのおそれが引き出す「洪水の後」の風景。「電話」という遠さもあいまって、「何もない」空間が胸のうちに広がってゆき揺さぶられます。

昨日外へ出した蜘蛛が

枕もと、飛び跳ねている

燦嗣いとり（愛知県）

まず、「昨日外へ出した蜘蛛」と今「枕もと」で「飛び跳ねている」蜘蛛が、同じ蜘蛛だと確信しているところが面白いと思いました。同じ作者による「楳円をたくさん書いていると／たまに卵の幽霊が紛れ込む」も、「楳円をたくさん書」くというところからすでに日常がずらされてゆくよう。どちらの作品もユーモラスでちょっとこわいところが魅力的です。

死にたい

と言いながら朝まつげ上げ

ベロニカ（神奈川県）

「死にたい」は“生きたい”の裏返し。今日を迎え撃つための準備として、「まつげ」という身体のささやかな部分が描かれているところが、生きるということの不可思議さを語っているようでもあり惹かれました。

学校に行って

早く嘘をつきたい

うすしか（東京都）

複雑な心理の陰影。同じ作者による「わたしの子なので叩きます」も単に理不尽な論理の表出ではなく、簡明な一文に、せめぎ合う心のうちが幾重にも折りたたまれていて、どちらの詩からも静かな叫びが聞こえてくるようです。